

乳幼児をもつ女性を支える環境について

— 母親のソーシャルサポートやサポート源の自己対象としての評価と育児満足度との関連 —

細野久容

1. 問題と目的

出産・育児は、女性の生涯発達における大きな節目である。個人のアイデンティティや役割においても、重要他者との関係性においても質的量的変化が大きい。こうした人生の移行期には、発達早期の自己の崩壊や断片化への恐怖が再活性化するような内的、外的ストレスが増すという(緒賀, 1993; Erikson, 1989)。Kohutは、人は生涯を通じて、他者の中に自分を承認し、共感し、目標を提供し、保護し、孤独感を緩和し、支える機能を見出すことが必要、としている(林, 1990)。こうした他者との関係をKohutは「自己対象関係」と命名した。これまで、生育歴と現在の親の養育態度の関係が議論されてきたが、親として育つためには、育まれ、見守られる「養護性(大日向 1988)」を、親自身が環境からリアルタイムで吸収することも重要なのではないかと考えられる。氏家(1999)も未熟な状態で親になることを開始する個人も周囲のさまざまな人の親性(大日向の養護性と同義)に支えられる必要性を強調している。ところで、必要な養護性、親性がどんなものであるかについて焦点づけた研究は始まったばかりである。

育児期のソーシャルサポートを扱った研究は、サポート源・機能・量、サイズなどを測定した研究と、重要他者との関係性に着目した研究に大別できる。前者は、①サポートの双方向性が扱えない:②サポートの送り手と受け手の関係性が不明瞭になるという問題点がある。他方、関係性を扱った後者は、サポート源との関係性がどのような行動を通じて伝えられ、受け手に解釈されるのか、については明らかにできない。母親を支える環境研究には、サポート源に対する認知やサポートの双方向性が鍵であると思われる。Kohutの自己対象論はサポート源の認知記述でもありと思われるが、緒賀(1993)は、Kohutの自己対象についての理論をベースに「自己-対象関係尺度」を作成し、大学生を対象とした研究を行っている。一方、Weiss(1971)は、サポートの双方向性も扱えるsocial provisionという概念を提出している。

そこで、本研究では、乳幼児の母親を支える対人的環境を探るために、サポートの受け手とサポート源との関係性・双方向性の視点を持つ。そのために、研究Ⅰの質問紙調査票による調査と研究Ⅱの半構造化面接のタイプの異なるアプローチを組み合わせる。また、測定した支

える環境が、育児の肯定感を育む環境であるかどうか見極めるために、育児に対する満足感の関連についても検討することとする。

2. 研究Ⅰ

【目的】

研究Ⅰの目的を①母親とサポート源との関係性(夫か、親としての先輩か、同輩か)の違いによる、自己対象機能の相違、実行サポートの相違について探る:②実行されたサポートや、自己対象としてのサポート源の評価が、母親の育児満足度に与える影響を探る:③、①②から、母親を支える環境について考察することとする。

【方法】

＜研究方法＞質問紙による調査。調査時期は、平成13年8月-10月。調査対象者は、0-3歳の子どもの母親。母親の平均年齢は32.0歳、核家族が92.7%、就労形態は、専業主婦71.6%、常勤者14.2%、非常勤者が13.8%。A県内保健所2カ所で乳幼児健康診査に訪れた母親ならびに、A県内の保育園2カ所、A県内の保健所と民間団体主催の親子教室で質問紙を配布。合計で600通配布し、289名の有効回答を得た。実質回収率は48.2%。

＜質問紙票の構成＞質問紙は、①個人背景要因;②自己対象ニーズ尺度;③サポート源の評価尺度(「自己対象としてのサポート源の評価尺度」と「実行されたサポート尺度」);④育児満足度尺度で構成された。まず、サポート源を「夫」「親としての先輩(以下、先輩)」「親としての同輩(以下、同輩)」の3つのカテゴリーに分け、各々尺度について評定してもらった。「自己対象としてのサポート源尺度」とは、サポート源がサポートの受け手にとってどのような存在であると認知しているのか測定するための尺度である。予備調査で得られた「支えの内容」についての記述を、Kohutの自己対象を軸に、Weiss(1971)などを参考に尺度を構成し、Kohutに造詣の深い精神医学者に内容的妥当性を検討していただいた。「実行されたサポート尺度」は、「調査時点までに、実際に受けた支援で、道具的、情動的、娯楽・遊興サポートを含む」と定義され、予備調査で得られたサポートの行動面を記述した。また、「母親の育児満足尺度」は、「親としての自信」「肯定的な育児感情」「肯定的な対児感情」「ゆとり」の4つの下位概念を想定して構成された。さらに、産後、自己対象ニーズが高まるの

ではないかと予想し、緒賀（1993）の自己対象尺度などを参考に「自己対象ニーズ尺度」を作成した。

【結果と考察】

「自己対象評価尺度」は、因子分析の結果、一因子構造と判断された（ α 係数：夫 .96, 先輩 .95, 同輩 .91）。サポート源によって自己対象機能評価に違いがあるかどうか検討するために、項目ごとに一要因分散分析の後に多重比較を行い、サポート源の順位に注目して項目を4群に分類し、「尊敬できる先達（理想像、指導者）」「甘えられる身内（退行的側面の受容、一体感）」「育ち合う仲間・似たもの同士（類似性、パートナー）」「心のよりどころ（安堵、支持）」の4つの機能が見いだされた。「実行サポート尺度」は、いずれのサポート源についても1因子解が適当と判断した（ α 係数：夫 .75, 先輩 .76, 同輩 .76）。つづいて、三群の平均値の比較したところ、実行サポート得点は、①夫②先輩③同輩の順に高かった。

「自己対象評価尺度」4群の得点と実行サポートの特徴から、回答者にとってのサポート源認知について考察した。「夫」は、親として責任を分け持つ相手であるが、本音を分かち合う仲間という立場にはないと認識されていた。夫は最も多様なサポート提供者で、協力量は少なくとも夫からのサポートがあると、「ゆとり」「育児肯定感」に最も効果が高かった。一方、「先輩」は、①豊富な経験・知識をもとに導き、見守る存在で、②わがままなどの甘えを暖かく受容し、子育ての責任をともに背負い、③相談相手になったり、看病するなど回答者の親のようなサポート提供者であると認識されていた。「同輩」は、非常に類似した立場から共感しあえるが、ある程度の距離をとった存在で、日常共に過ごすサポート提供者として認識されていた。

サポート源への期待は二重構造であった。まず回答者の自尊心を支え、安心感を与える対象がサポート源に選定され、サポート源の状況や適性、回答者との関係性を評価した上で、適当と判断されたサポート源に「尊敬できる先達」「甘えられる身内」「共に育ち合う仲間」自己対象機能が振り向けられると考えられる。また、結果から、回答者が他者との関係性を評価する際に、①家族や身内であるか否かという血縁としての「親しさ」と、②立場や状況、世代の類似性といった「近しさ」の二基準があることが伺えた。

「育児満足度尺度」について、主成分分析を行い、2因子「育児肯定感（ α 係数 .96）」と「ゆとり（ α 係数 .54）」が見いだされ、これらには正の相関があった。したがって育児や子どもへの肯定感と、母親個人としての時間を持つ度合いとは相補関係にあるといえる。ゆとり

とサポート源別に自己対象としての評価との相関関係を検討したところ、夫とは、有意な中程度の正の相関が、先輩とは弱い正の相関が見られた。一方、育児肯定感とはいずれのサポート源とも中から弱程度の有意な正の相関関係にあった。また、夫実行サポートと先輩実行サポートは、ゆとりと中程度の正の相関関係があり、同輩実行サポートとは無相関であった。

つづいて、育児肯定感、ゆとりの規定要因を検討するために、重回帰分析を試み、さらにパス解析をおこなった。まず、「ゆとり」に向かうパスから、夫評価がゆとりの要であることが伺えた。つぎに、「育児肯定感」に向かうパスからは、「ゆとり」と「先輩評価」が「育児肯定感」の要になっていることが伺われる。

またサポート関係に着目すると、「自分は必要とされている」と強く感じるサポート源ほど、多くの種類のサポートを得ていた。サポート関係の双方向性が伺えた。

研究Ⅱ

【研究Ⅱの目的】

研究Ⅱでは、受け手で内容ある母親の、①送り手との関係性認知；②関係性とサポート内容；③サポートを引き出した結果、サポート源や自分に対する認知の変化；④育児肯定感やゆとりへの影響；について質的研究により検討することを目的とする。

【方法】

＜調査時期＞2001年9月中旬から10月下旬。

＜研究対象者＞研究Ⅰの回答者のうち、面接を申し出た乳幼児の母親8名全員が専業主婦で、家族形態は核家族。年齢は26歳から38歳。

調査方法：1時間から1時間半の半構造化面接を行った。質問項目の要点は、①産後、支えになったと思う人；②支えと感じた理由；③、①②をもとに、サポート源に、何を期待しているか；④サポート源とつきあう際に心がけていること；⑤サポートの効果：の五つ。

【結果と考察】

まず、研究対象者は、母親役割の自己規定と、それに付随するサポート源との関係性の認識、サポート源に対する役割期待が明確であることがわかった。つぎに、研究対象者は、日頃から対人交流の場づくりや維持に積極的であり、彼女ら自身がサポート源にサポートを提供し、コミュニケーションも巧みであった。こうしたサポート関係の土壌づくりは、①サポート源へのアクセス可能性を高め；②サポートを受けることに対する合理化に成功し；③合理化の成功によって、自己効力感や自尊感情を傷つけずにサポートを得ることを可能にし；④サポート源に対する理解、評価能力を高め；⑤サポート源の適性、

制約などに合致した自己対象機能やサポートの期待を構成しやすくなる；⑥自己効力感や自尊感情の維持，体験の消化・意味づけによる自己の強化；という効果をもたらしていた。

そして，これらの結果から，支え合う関係を構築するプロセスを概観すると，①研究対象者自身の明確な親役割の自己規定し；②依頼したいサポートと依頼したいサポート源を検討し；③育くんできたネットワークの中からサポート源を選択し，期待する自己対象機能やサポートを割り当て；④依頼したい具体的なサポート内容を言語化して伝達し；⑤サポートが得られたら，サポート源に対して肯定的なフィードバックする；という流れであった。さらに，そのようなコミュニケーションを繰り返す中で，研究対象者達は，サポート源の自己対象機能割り当てやサポート源との関係性の規定を，柔軟に修正ある

いはより明確にしていたことがわかった。

【総合的考察】

先行研究で子どもや母親が発達するために必要な「養護性」「親性」「母性的環境」と概念化されてきたものは，自己対象という観点に立てば，承認し，共感し，保護し，調整し，橋渡しするなどさまざまな自己対象機能であった。本結果からは，そうした自己対象機能は，夫，親としての先輩，同輩といった複数のサポート源から，能動的に引き出され，また，母親達自身もサポート源へサポートを提供しているという双方向の関係であることが見いだされた。本研究で見いだされたサポート源との関係性やサポート体制構築のプロセスは，援助のための一つの目標になると思われる。今後，育児に否定的な母親など研究対象を広げることにより，母親を支える環境についての知見が深まると期待できる。